

A・MUSEUM

vol.97
[2018. 12. 15]



ミュージアムパーク
茨城県自然博物館



抱卵するカイツブリ



カイツブリの卵(撮影:深瀬 洋)

カイツブリの営巣と抱卵

当館の野外施設にあるとんぼの池では、9月中、カイツブリが抱卵する姿を見ることができました。カイツブリは、ほぼ全国で繁殖する留鳥で、水上生活を主としています。歩くのは苦手ですが潜水が得意で、ときには30秒近くも潜水して餌をとります。当館に隣接する菅生沼でもその姿を見ることができそうですが、抱卵するカイツブリの姿はなかなか見ることはできません。

カイツブリは、ヨシ原や水中の水草の上に浮き巣をつくり営巣します。巣材は水面に浮かんでいるヨシやマコモなどの枯れた茎や葉などで、オスとメスが共同で巣をつくります。

とんぼの池には多くの野鳥が訪れます。これからも、鳥たちがどんなドラマを見せてくれるのか楽しみです。(教育課 加倉田 学)

第74回
企画展

体験！発見！恐竜研究所 –ようこそ未来の研究者–
Welcome, Future Scientists! –Dinosaur Discovery Lab Experiment–

当館には、恐竜が大好きな子どもたちがたくさん来館しています。化石関連のイベントの際には、「どうすれば恐竜の研究をする仕事に就けますか？」と質問をされることがよくありますが、この質問に答えるのはとても大変です。日本では恐竜を研究する仕事に就ける人数はとても少なく、「こうすればなれるよ」という決まった道筋を提示できないためです。そこで、今回の企画展の方向性を考えるにあたり、子どもたちが恐竜の研究者になった気分で楽しく学べる展示をつくりたいと考えました。そして、恐竜に関する展示をとおして、生物学や地質学に関する基本的な知識や、自然科学研究の進展を楽しみながら学ぶことができるような展示を目指すことにしました。

例えば、生物学の基本的な知識として、学名というものがあります。難しく専門的なものに聞こえますが、ティラノサウルス・レックス (*Tyrannosaurus rex*) という学名は多くのお子さん知っているはず。少なくとも、本来とても身近なはずのイヌやネコ、もしかすると人間の学名よりもよく知られているのではないのでしょうか。また、「白亜紀」などの地質時代名も地質学上の専門用語ですが、恐竜図鑑などではお馴染みの言葉です。そして、おそらく恐竜ほど、世の中に「自然科学研究の進展」を実感させるものは無いで

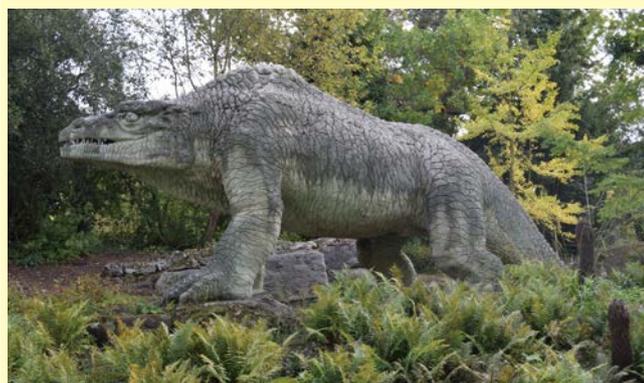
しょう。30年ほど前まで、恐竜はみなウロコで覆われた爬虫類で、大昔にすべて絶滅した動物であると考えられていました。しかし、1990年代後半以降には羽毛が生えた恐竜の化石が多数発見され、さまざまな恐竜がまるで鳥類のように羽毛をまとった姿で復元されるようになりました。そして、現在では「鳥類は恐竜の生き残りである」という考え方が広まっています。

今回の企画展では、このような恐竜研究の歴史や最新の分類、日本の恐竜研究などについて紹介します。さわれる標本や化石発掘体験などの体験展示やワークシートなども設置予定です。それらをご覧いただくことで、ぜひ新たな発見をしていただき、劇的に変化してゆく自然科学研究の魅力をお楽しみください。

(資料課 加藤太一)

展示構成

- 第1章 恐竜とは？
- 第2章 恐竜研究の昔と今
- 第3章 恐竜の分類、鳥への進化
- 第4章 恐竜じゃない！中生代の爬虫類たち
- 第5章 日本の恐竜研究



獣脚類メガロサウルスの復元模型
(イギリス・クリスタルパレスガーデン：1850年代制作)



獣脚類ティラノサウルスの復元ロボット(当館：2017年制作)

会 期 2019年2月16日(土)から2019年6月9日(日)まで

※2月16日(土)は午後1時からの公開となります。

開館時間 9:30～17:00 (入館は16:30まで)

休 館 日 毎週月曜日

(※ゴールデンウィークなど、月曜日に開館し、その他の日が休館になる場合があります。事前にお確かめください。)

●自然講座 恐竜の研究～野外調査、発掘から生体復元まで～

日 時：2月17日(日) 13:30～15:30

講 師：對比地孝巨氏(東京大学)

場 所：博物館内

対 象：中学生以上

定 員：30名(事前申込・先着)



企画展の広報と展示解説書作成

企画展ができるまで 3

シリーズ「企画展ができるまで」の3回目は、「広報」と「展示解説書作成」を紹介し

ます。企画展のタイトルの決定後、企画展開催の約3か月前から、広報のためのポスター作成を行います。まず、企画展チームが企画展をどのようなイメージで伝えたいかなどの話し合いを重ね、原案を作成します。そして、プロのデザイナーと相談しながら、ポスターデザイン案を3つほど作成し、館長を含めた職員との話し合いを重ねた上でデザインを決定します。その際、ポスターを見ると企画展に行きたくなるような仕掛けを考えることも重要です。例えば、現在開催中の「くだもの展」では、企画展のオリジナルキャラクターをポスターに登場させるなど工夫をこらしています。ポスターデザインが決定したら、そのデザインのイメージをもとにチラシ、招待券、電車内吊りポスター、歩道橋などに設置する横断幕、館内掲示用看板などのデザインを決定します。ポスターでは不採用になったデザインも、これらに採用する場合もあります。ポスターの送付先は近隣の各小中高等学校や、博物館の各協力機関、企画展協力者など多岐にわたり、職員が手分けをして配送・郵送をします。それとあわせて、各新聞社、情報誌、情報サイトなど、各媒体へ

の企画展の情報提供も行っています。

また、企画展を支える重要な作業として、展示解説書の作成も行っています。展示解説書を作成することで、展示のストーリーをもう一度練り直すことができ、より良い展示にすることができます。また、展示解説書の文章が、展示室の解説パネルのもとになります。展示解説書については、まず企画展チームで、どのような構成やコンセプトにすれば展示についてより効果的に伝えることができるかの検討を重ね、方針が固まり次第、分担して原稿執筆に入ります。そして、企画展メンバーによる入念な読み合わせとあわせて、職員全体での校正を4回ほど行います。この際、学芸員だけではなく事務職員も含め校正を行うことで、一般のお客様にもより分かりやすい表現になるよう修正を重ねていきます。ときには、全体の構成の見直しや一部の内容を丸ごと差し替えるなどの試行錯誤を繰り返しながら、最終的な完成版となります。

このように、企画展の広報と展示解説書作成は、多くの人に関わり、さまざまなプロセスを経て行われています。これらの活動も全て、企画展をとおして、より多くのお客様に、博物館をより楽しんでいただきたい一心で行われています。(企画課 松浦卓也)



くだもの展ポスター原案



くだもの展ポスター完成版



展示解説書校正紙

国際博物館会議

国際博物館会議 (ICOM) が来年9月に京都で開催されます。この会議は、1946年に創設され、世界141か国から約3万7千人の博物館専門家が会員登録しています。会議は3年ごとに開催され、今回が25回目となり、日本でははじめての開催です。会議は30以上の専門分野に分かれ、研究発表だけでなく情報交換や知識の共有が図られます。当館は会議の正式な団体会員で、3名が会員として登録されています。京都大会

館長コラム by director YOKOYAMA

では自然史部門で発表し、当館の現状について紹介し、他国の博物館との交流を図っていきたくと思っています。9月には海外の博物館関係者が各地の博物館を見学する予定です。海外ではICOMのメンバーであれば無料で見学できる場所が多くありますが、日本ではあまりありません。当館の良さを宣伝してもらえよう、海外のICOM関係者が9月だけでも無料で入館できるように配慮できればと考えています。



イラスト：小泉美絵 (ミュージアムコンパニオン)

筑波山地域の花崗岩や斑れい岩はいつできた？

研究報告 1

筑波山は、茨城県の象徴的な山として親しまれています。この筑波山の山頂付近には斑れい岩が、中腹から裾野にかけては花崗岩が分布しています。これらの岩石は、かつて地下でマグマがゆっくり冷え固まってできた深成岩です。花崗岩は北方に連なる足尾山や加波山、そして笠間地域まで広く分布しています。

ところで、この花崗岩や斑れい岩はいつマグマから固まってできたのでしょうか。これまでの研究で、斑れい岩は約7500万年前（中生代白亜紀後期）、花崗岩は6300～5800万年前（新生代古第三紀初期）とされてきました。その根拠となる年代測定はいずれも20年以上前のものであるため、今回、国立科学博物館の堤之恭博士との共同研究として、これまでと異なる年代測定法を用いて冷却年代の検証を行いました。

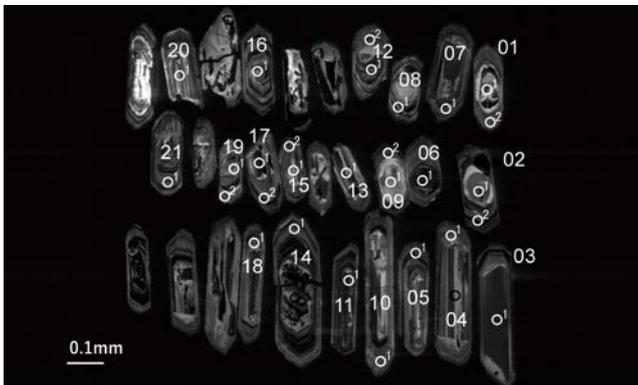
今回の年代測定は、ジルコンとよばれる鉱物粒子を用いて、ウラン-鉛放射年代法（U-Pb法）で冷却年代を求める方法を使いました。まず、花崗岩や斑れい岩のサンプルを採取して小さく砕き、高電圧をかける装置で鉱物粒子の粒間で剥がして粉末状にします。この粉末を比重分離したあと、実体顕微鏡で大きさ0.1～0.5mm程度のジルコン粒子を1粒ずつ丹念に探して拾い出し、測定試料を作製します。この試料を誘導結



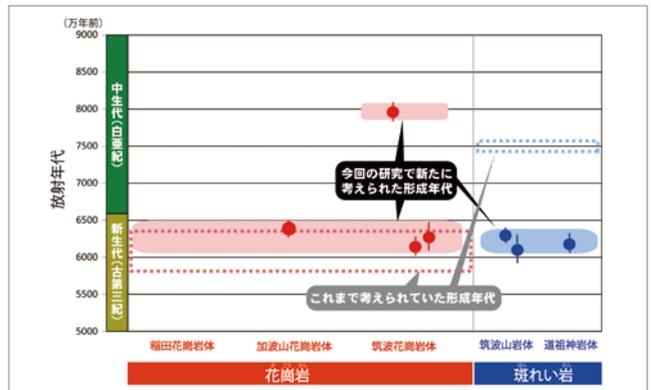
筑波山全景（中腹から上部は斑れい岩、山麓部は花崗岩からなる）

合プラズマ質量分析計（LA-ICP-MS）で含まれているウランや鉛などの量を測定して、U-Pb放射年代値を計算しました。

この分析の結果、斑れい岩はいずれも6300～6100万年前の年代値になり、花崗岩は約8000万年前と6400～6100万年前の年代値に分かれる結果となりました。このため、これまで筑波山地域の形成史として語られてきた年代論について、見直しが必要であることが明らかになりました。筑波山地域の深成岩類についてはまだ分からないことが多く、今後、さらなる研究が必要になりそうです。（教育課 小池 渉）



年代測定に使用したジルコン粒子（電子顕微鏡写真）



放射年代測定の結果

ホッキョクグマの「あしのうら」

雪と氷に覆われた北極で暮らすホッキョクグマ。冷たい氷の上で暮らして、足が冷えたり、すべったりはしないのでしょうか？

はく製をよく見てみると、肉球以外は毛で覆われていることがわかります（写真）。毛は足先を温かく保つとともに雪や氷をしっかりとらえ、滑り止めとしても役立っています。また肉球の表面には、小さな凹凸があり氷の上でも踏ん張りが効き、これらが北極でも暮らしてい

る理由の1つです。

それに対して主に森林で暮らすツキノワグマの足の裏は長い毛がなく、足の裏全体が肉球になっており森の中を静かに歩いたり木に登ったりするのに適した形になっていることがわかります。

生きものの足の形は生息している環境や行動により異なった形をしています。博物館でもさまざまな動物の「足の形」に注目してみると、新たな発見があるかもしれません。

小さな発見—ミュージアムコンパニオン—

（ミュージアムコンパニオン 中山真由美）



ホッキョクグマとツキノワグマの足の裏（右下）

霞ヶ浦でオオバナミズキンバイを駆除しています！ 研究報告2

オオバナミズキンバイは、南米および北米南部原産の多年生植物です。黄色い花が美しいことから、観賞用として栽培されていましたが、茎の断片から発根するほど、繁殖力が旺盛で、在来種の生育環境を奪うことや、近縁な在来種ミズキンバイと交雑することが心配されています。2014年にオオバナミズキンバイは特定外来生物に指定され、国をあげて防除を進めていくことになりました。

オオバナミズキンバイは、これまで滋賀県の琵琶湖、兵庫県、和歌山県のため池など、西日本では確認されていましたが、東日本では見つかっていませんでした。ところが、2017年5月4日に本県の霞ヶ浦北西部の湖岸で、生育が確認されました。

地元の方の連絡を受け、当館職員も含めた専門家や関係者がかけつけました。オオバナミズキンバイは、在来種のドクゼリやマコモとともに10m四方の一面に群生していました。付近の湖岸では、在来種のヨシの群落の中に点々と入り込んでいました。そのまま放置しておくと、在来種の生育環境を奪いながら霞ヶ浦全域に広がってしまう危険性があります。周辺のアス田に広がれば農業被害も心配されます。そこで、国土交通省が中心となって駆除を行うことになりました。



オオバナミズキンバイの花(2017年6月)

2017年8月28日にオオバナミズキンバイの駆除作業が行われました。重機を使って排水路内に生育するものを泥ごと持ち上げて、残った茎や根の切れ端を網ですくいあげて取り除きました。周辺のヨシ群落の中に生育しているものについても、根から抜き取りました。約1か月後にようすを見に行くと、1cmほどの小さな葉をつけた個体が点々と見つかりました。駆除作業の際にこぼれ落ちた茎や根の切れ端から増えたと考えられます。その後、冬になると個体数が減少したため、このまま減っていくかと思われましたが、翌年の夏になると、再び個体数が増え、水路一面に広がってしまいました。

経過観察を続けて分かったことは、駆除後も継続的に抜き取りを行わないと、1年でもその状態に戻ってしまうということです。オオバナミズキンバイは、冬になると急激に減少しますが、夏の繁殖力がとても高いのです。

2018年10月1日、当館の呼びかけで、国土交通省が中心となって再び駆除作業を行いました。今後、再び増えてしまうことがないように、地元の方とも協力し、定期的に駆除を行いながら根絶を目指したいと考えています。(資料課 伊藤彩乃)



オオバナミズキンバイの駆除作業(2017年8月)

南向きでもキタマクラ

海の水槽の「磯の生きものたち」のコーナーにキタマクラという魚がいます。キタマクラはカワハギに似ていますが、毒をもつフグのなかまです。昔の人はカワハギと間違えて食べてしまい、亡くなる方がいました。亡くなった方を北向きに寝かせる風習とこの魚を食べてはいけないという注意からキタマクラと名付けられたと言われています。

そんな恐ろしい名前をもつキタマクラですが、体全体が茶褐色をして

おり、よく見ると美しい斑紋があります。更にオスのキタマクラは夏の産卵期にきれいな青色の婚姻色を出します。それに対し、メスはオスより小柄で、色の变化などはありません。

残念ながら、当館にいるキタマクラはメスなので、色の变化を見ることはできませんが、ぜひキタマクラの泳ぎ方に注目してみてください。尾ビレはあまり使わず、背ビレや胸ビレ、尻ビレを素早く動かして泳ぐ

おさかな通信

姿がとても愛らしいです。
(水系担当 日名川祐亮)



当館のキタマクラのメス

画像資料の寄贈とその活用

収蔵品紹介

博物館において展示、収蔵されている実物標本は1次資料とよばれています。それに対し、複製や模型、画像、映像などを2次資料といいます。「2次」資料といっても、化石の複製は研究に、写真や模型は展示に活用されるなど、博物館にとって重要な資料です。今回は寄贈された画像資料について紹介します。

1つ目は、今井初太郎氏に寄贈いただいた昆虫写真です。今井氏は昆虫生態写真を中心に撮影し、さまざまなフォトコンテストで入賞しています。2008年にも約6,200点の写真をいただき、今年は2008年以降に撮影された10,000点を超える写真を寄贈していただき

ました。写真には撮影日や撮影地のデータもあり資料としての価値も高く、展示や展示解説書などに活用させていただいています。

2つ目は、茨城の植物研究の第一人者である茨城大学名誉教授の鈴木昌友氏（故人）の植物写真です。図鑑作成のために鈴木氏などにより撮影された約16,000点のフィルムのほとんどは分類群順に並べられていて、鈴木氏の人柄と植物に対する情熱が感じられます。当館ではこれらを大切に保管、整理し、活用していきたいと思います。

（資料課 中川裕喜、企画課 鷗沢美穂子）



ミヤマクワガタ（今井初太郎氏の昆虫生態写真より）



カタクリ(左)とミヤマスカシユリ(右)（鈴木昌友氏のコレクションより）

流れ星？飛行機？人工衛星？

なるほど博物館 いばレックスとコティランが自然に関する情報をわかりやすくお伝えします。



コティラン

冬の星空はきれいだなあ。あっ流れ星!!
お肉食べたい、お肉食べたい…

どれどれ？ ああ、あれは流れ星ではなく飛行機の光だよ。



いばレックス

ええ!? そうなんだ…。流れ星と飛行機の光はどうやって見分けるの？

流れ星は、夜空を明るい光の点を通るけど、一瞬しか見えないんだ。飛行機は、白や赤、青の光が点滅して見えるよ。

じゃあ、あっちの点滅せずにスーッと移動している光は流れ星？



流れ星と飛行機
（2001年しし座流星群 筑西市）



オリオン座を横切る人工衛星 (ISS)

おや、今度は珍しいものを見つけたね。あれは人工衛星だよ。

え、人工衛星って肉眼で見えるの!?

人工衛星は、自分で光を出しているわけではないけれど、太陽の光を反射して光って見えるんだ。流れ星よりゆっくりと点滅せずに移動して、長い時間見えているのが特徴だよ。

流れ星も人工衛星と同じくらい長い間見られれば、願いごと3回言えるのになあ。

流れ星は、宇宙のちりが、地球の大気に飛びこんで蒸発するときに発光するものだからね。見られる時間は1秒以下のものがほとんどだよ。もし、願い事を3回言いたいなら、2019年は1月4日明け方のしぶんぎ座流星群をねらうといいよ。1時間あたり15個程度の流れ星が見えると予想されているんだ。

それなら、ぼくの願いごとかな叶いそうだね。がんばって早起きしてみるよ!!

（資料課 高野朋子）

イラスト：ツク之助

トピックス

○ウォークラリー 20周年！

9月24日（月・休）に当館の野外施設および水海道あすなろの里を会場として、第20回ネイチャーウォークラリー大会を開催しました。

このイベントは、当館の野外施設などで自然に触れていただくことを目的として、1999年に開館5周年記念事業としてスタートしました。記念すべき20回目となる今回は、318組1,181人にご参加いただき、参加人数はのべ3万2千人を超えました。

ルールは、約6kmまたは約3kmのコースを歩いて、動物、植物、地学に関するクイズを解いたり、観察したりしながらゴールを目指すというものです。早くゴールすれば高得点になるというわけではないため、体力に自信がない方、自然について詳しくない方も楽しんでいただくことができます。

当日は幅広い年齢層の参加者があり、地元をはじめとする多くの団体からご提供いただいた、野菜や卵などの賞品を手にしながらかつ入賞者の姿が印象的でした。ご参加いただきありがとうございました。

（企画課 芦川孝明）



第20回ネイチャーウォークラリー大会スタート時のようす

○「いばらき☆フルーティ11」大健闘！

当館で10月6日（土）から第73回企画展「くだもの展—ギュッと濃縮！果物の魅力—」を開催しています。この企画展では、案内役としてオリジナルキャラクターが登場しています。果物が大好きな11人組のアイドルグループ「いばらき☆フルーティ11」です。このキャラクターが、インターネットミュージアムの博物館キャラクターグランプリ「ミュージアムキャラクターアワード」にエントリーしました。

投票期間は7月24日（火）から9月6日（木）までで、全国の博物館のキャラクターがエントリーしました。「いばらき☆フルーティ11」には、「断然かわいくて个性的だよ！」「くだもの展行くよ！頑張ってる！」などたくさんのコメントが寄せられました。結果は335票で、全国で71キャラクターのうちの20位でした。応援ありがとうございました。

「くだもの展」は来年の1月27日（日）まで開催しています。「いばらき☆フルーティ11」のメンバーがお迎えいたしますので、是非お越しください。

（企画課 泉水正和）



いばらき☆フルーティ11

○サンデーサイエンス、参加者6万人達成！

11月4日（日）、サンデーサイエンスの参加者が6万人を達成しました。

サンデーサイエンスは毎週日曜日に実施しているイベントで、毎週たくさんのお客様に参加していただいています。11月は「秋の実りで壁かけをつくろう」というテーマで開催しました。秋にはたくさんの木の实ができます。イベントでは、当館の野外において、ドングリの観察と採集を行い、自分の見つけた木の实を使って、壁かけをつくりました。イベントをとおして、ドングリの種類によって形や大きさが違うことに気がつくなど、身近な自然に関心をもつきっかけになったようです。

このようにサンデーサイエンスでは、自然に対する関心を高めていただけるよう、自然博物館ならではの観察や実験、工作を実施しています。動物・植物・地学の3分野の内容があり、毎年、研究室ごとに新しいテーマを考えています。

今後もみなさまのご期待に沿える内容を企画していきたいと思えます。日曜日に来館した際は、ぜひ、ご参加ください。（教育課 相田裕介）



6万人達成回のサンデーサイエンスに参加したみなさん

第17回世界湖沼会議が開催されました



世界湖沼会議の様子(上段左から:学生会議, ジュニア学芸員による発表, 伊藤学芸員による発表。下段左から:主催者等の取り組みの発表, 霞ヶ浦環境科学センターでの展示, いこいの村湖沼での当館のブース展示)

前号で予告をお伝えしましたが、10月15日から19日までに茨城県で第17回世界湖沼会議が開催されました。50の国と地域からのべ5,500人ももの研究者・行政機関・市民などが集まり、特にメイン会場であるつくば国際会議場は大変な賑わいでした。当館からは、主催者などの取り組みの1つとして「菅生沼における絶滅危惧植物の保全活動」、学芸系職員個人の調査研究結果として伊藤彩乃学芸員らによる「霞ヶ浦における特定外来生物オオバナミズキンバイ（アカバナ科）の防除とその後の生育状況」、土屋勝元職員らによる「池干しによる茨城県自然博物館の「とんぼの池」の再生」の3題のポスター発表を行いました。また、先行して14日に行われた世界湖沼会議学生会議では、当館のジュニア学芸員が「とんぼの池の水質及び動物相の調査」というタイトルで発表するとともに、小幡和男首席学芸員が高校生の部の司会を務めました。

国内外のみなさんに湖沼と関連機関の取り組みを実際に見ていただくために、17日にはエクスカーションとよばれる現地視察会が行われました。当館では、霞ヶ浦環境科学センターといこいの村湖沼に、県内の湖沼の生物多様性を紹介する展示ブースを設け、貴重な動植物の標本やレプリカを紹介しました。人と湖沼のよりよい未来のために何ができるのか、たくさんの方が思いを巡らせた1週間になったのではないのでしょうか。(企画課 鷗沢美穂子)

編集後記

今年は、火星の大接近や世界湖沼会議などがありました。一方で大きな被害をもたらした自然災害もあり、自然の奥深さと脅威を強く感じる年でした。平成の時を歩んできた博物館。たくさんの思い出がこの場所から生まれたであろうことを思うと感慨深いものがあります。来年も当館から笑顔をお届けできたら良いなと思う年の瀬です。(S.F.)

【交通案内】



- 車ご利用の場合
 - 常磐自動車道谷和原ICから20分
 - 圏央道坂東ICから25分
 - 鉄道・バスご利用の場合
 - 東武アーバンパークライン(野田線)愛宕駅下車～茨城急行バス「岩井車庫行き」乗車～「自然博物館入口」下車、徒歩10分
 - つくばエクスプレス、関東鉄道常総線守谷駅下車～関東鉄道バス「岩井/ターミナル行き」乗車～「自然博物館入口」下車徒歩5分
- ※事前に発車時刻等をご確認ください。



【開館時間】

9:30から17:00まで
(入館は16:30まで)
※ペット、遊具、テابل、椅子及びベンチ等のお持ち込みはご遠慮ください。

【入館料】

区分	本館・野外施設		野外施設のみ	年間パスポート
	企画展開催時	通常時		
一般	740円 (600円)	530円 (430円)	210円 (100円)	1,540円
満70歳以上	370円 (300円)	260円 (210円)	100円 (50円)	
高校・大学生	450円 (310円)	330円 (210円)	100円 (50円)	1,030円
小・中学生	140円 (70円)	100円 (50円)	50円 (30円)	310円

※()内の数字は、20名以上の団体料金です。
※県外の学校団体は、児童生徒数にかかわらず団体料金と適用されます。
次の日は入館料が無料です。
●5月4日(みどりの日) ●6月5日(環境の日)
●11月13日(茨城県民の日) ●3月21日(春分の日)
●高校生以下の児童・生徒は毎週土曜日
(ただし、春・夏・冬休み期間を除きます。)
●高齢者(満70歳以上)
1月、4月、7月の第3土曜日、9月15日～9月21日(老人週間)(ただし、休館日を除きます。)

【休館日】

●毎週月曜日
※12月24日(月)、1月14日(月)、2月11日(月)は開館し、翌日が休館となります。
※12月28日(金)～1月1日(火)は休館となります。



自然博物館ニュース A・MUSEUM (ア・ミュージアム)

企画・編集:ミュージアムパーク茨城県自然博物館企画課/発行2018年12月15日
〒306-0622 茨城県坂東市大崎700番地 TEL.0297-38-2000 FAX.0297-38-1999
URL <https://www.nat.museum.ibk.ed.jp/>
E-mail webmaster@nat.museum.ibk.ed.jp



ミュージアムパーク茨城県自然博物館友の会
入会すると入館料が無料に! (年会費)

家族会員	4,000円	個人会員	3,000円
子ども会員	1,000円	賛助会員	10,000円

※特典 イベントへの参加、ショップ・レストランでの割引

ミュージアムパーク茨城県自然博物館は、誰もが親しめ、誰もが楽しめるア・ミュージアム(アミューズメント+ミュージアム)をめざしています。